

# 二つの『向う側』

— 日野啓三作品の展開 —

山根 繁 樹

はじめに

全く同じ標題を持つ二つの小説が存在する。それ自体は、驚くにはあたるまい。そのような事例はいくつも指摘することができる。だが、そこに同一の署名が添えられていればどうだろう。それにしたところで、いわゆる「連載」であれば、当然の成り行きである。あるいは、そうでないとしても、そのようなことはありうるのである。それぞれの小説を、それとして読めばよい。しかし、そのうちの一つの小説が、もう一方の小説を読むことを促しているとしたらどうか。あるいは、小説を書いたと語る者が登場する小説があり、その者が書いたと名指す小説が同じ標題のもう一方の小説だと読む誘惑が、抗いがたいものだとしたら。

日野啓三の、二つの『向う側』という小説は、そのような誘惑を備えて存在している。それらが一七年を隔てて書かれているということの問題にしないとしても、「連作」として並列化することは躊躇される。そうであるとすれば、あえてそれらが備えた誘惑に身を委ね、二つの『向う側』を読んでみようというのが、本稿の目論見である。

初めの『向う側』（以下『向う側』①）は、一九六六年三月、雑誌「審美」第二号に発表された。この時の署名は「野火啓」<sup>①</sup>。ただし、のちには「日野啓三」の署名を伴って単行本化された。これは、日野啓三の小説第一作である。もう一方の『向う側』（以下『向う側』②）は、一九八三年八月、「中央公論」誌上に発表された。署名は「日野啓三」である。<sup>②</sup>

私は以前、『向う側』①について論じたことがある。<sup>③</sup>『向う側』①では、内戦状態の国で《向う側へ行く》<sup>④</sup>と言いつつ残して消息を絶つた特派員について、《私》が調査を行う。『向う側』①は、その調査自体と調査報告とみられる会話を交互に織り交ぜ、《向う側》とは何かを追い詰めていく構造を持っている。私は、《向う側》という言葉で表象されている事柄を、言葉によって表象されない世界と結びつけた。つまり、言葉では、《向う》<sup>⑤</sup>としかいいようのない世界が、《向う側》<sup>⑥</sup>だということである。その上で、私は、『向う側』①において《向う側》の世界自体が開示されたとは考えなかった。《向う側》とは、その性格上、言葉によって表象されたいはずであり、『向う側』①でその困難が乗り越えられたとはいえないからである。

私は、日野の『向う側』①による作家としての出発が、《向う側》

という表象困難な世界を、小説において捉えようとする試みとして始まったと考える。そして、一七年余りを経て、日野は、再び『向う側』②と題して小説を書いた。その小説は、どのように小説第一作『向う側』①と関わり、どのように読みうるのか。本稿では、主として『向う側』②の分析を通して、二つの『向う側』が示す意味を明らかにしてみたい。それによって、日野啓三作品の展開について、一つの視座を示すことができると考えている。

### 一、重なる二人の《私》

『向う側』①は、国名も年代も特定されない内戦状態の国を舞台としている。そして、『私』は、消えた特派員について調査するため、そこを訪れており、『私』自身が特派員であるとは考えにくい。なぜなら、『私』は、上司と思われる人物に調査報告をしており、調査後すぐに帰国したと考えられるからである。また、上司と思われる人物は、報告を受けた後、『おかげでこの事件も形がつく。本当にご苦労だった。』と言っており、これもまた『私』の任務が調査であったことを示している。

一方、『向う側』②の『私』は、ベトナム戦争時の初代常駐特派員であったという経歴を持ち、帰国後小説を書き始めた作家である。これは、『向う側』②の語り手である『私』が、小説のほぼ冒頭で明かすことであり、とりあえずそこまでは、『向う側』①と『向う側』②の『私』は、異なる人物だといえる。『向う側』②において、『私』は、『向う側』という題で『小説を書いたことがあると語っており、

『向う側』①をその小説だと読むならば、『向う側』②の『私』は、『向う側』①を書いた人物として設定されているということが可能である。まずは、二人の『私』が異なっている点から確認しよう。『向う側』①において、『私』は、その土地に常駐していたと思われる特派員『彼』の行方を追う。

とくに、彼があの場末の正体不明のバラックに泊りこみ始めるまで、事務所兼居室にしていたこの二階の部屋で、いまもそのままになっている新屋の隅の新聞の山、壁の大版地図、幾冊ものスクラップ・ブック、整理ダンスの上の焼きのりのカン、イスの背にきれいにたたんでかけてある替えズボン、机の上に白い紙をはさんだままの携帯用タイプライターなどに囲まれていると、意外に身近かに、まるで夢をみながら夢の中の自分を外から私が眺めているような（つまり形の上では離れているが、底深くつながり合っているような）奇妙に濃密さをもって彼が感じられてくる。

（『向う側』①、傍点引用者、特に断らない限り以下同じ。）  
特派員『彼』は、明らかに常駐していたと考えることができる。『私』は、『彼』を追ってやって来た人物である。それに対して、『向う側』②の『私』は、『サイゴンをしのぶ会』という集まりに参加しているが、そこには、ベトナム戦争当時に初代の常駐特派員だった『私』の仲間はいない。

ところが、実際に会場に着いてみると、当時の特派員仲間の顔はひとりも見えなかった。私のあとから各社とも駐在員は二人になっただけでも、初代の常駐特派員だった私のときは各社

ともひとりずつだった。それだけに仲がよかったのである。

『向う側』②

この二つの引用から考えれば、『向う側』①の内戦状態の国がベトナムだとしても、それぞれの《私》は別人であることが明らかである。したがって、『向う側』②の《私》が「向う側」という題で小説を書いた経験を持つとしても、その小説は、あくまでもフィクションであり、『私』自身とは別の《私》を語り手として設定したはずである。

整理してみよう。『向う側』①では、特派員が《彼》と呼ばれており、その行方を調査するのが《私》である。一方、『向う側』②では、初代常駐特派員の《私》が、帰国後「向う側」という小説を書いたと設定されている。『向う側』①の《私》は、『向う側』②の《私》によって創出された、フィクションな人物だと理解しなければならぬ。だが、このことは、『向う側』②において、ある矛盾を生じさせる。『向う側』②においては、フィクションとしての小説を書いたはずの《私》が、その小説の中の《私》として生き始める、という事態が生じているのである。

『向う側』②において、「サイゴンを忍ぶ会」に出席するにあたりサイゴンでの濃密な体験を懐かしく感じていた《私》は、会場で当時の仲間にあえなかつたことで、期待はずれの気分を味わう。そして、『私』は、既にホ・チミン市となったサイゴンが過去のサイゴンではないこと、過去の体験が記憶としてしか残っていないことを考えながら、次のような気分陥っていく。

それはわかっている。それはすでに遠すぎる時であり、もはや

存在しないところだ。だがその在りもしないものへと、心がじわじわとひろがり流れてゆこうとする。心の仕切りのようなものが溶けかけている、と感じて、その気分はかつて経験したことがある、と気づきかけた。何かに呼ばれている感じ。どこからか、どこへともなく……。必ずしも不快ではない。そして不快でないことが、かえって不安だった。

『向う側』②

《私》は、《心の仕切りのようなものが溶けかけている》という《気分》を、《かつて経験したことがある》と《気づきかけ》る。《かつて》がいつのことかは明らかではない。ただし、それが普段は意識に浮かばないような《かつて》であることは確かである。そして、ここでの《気分》は、会場で期待はずれの気分を味わい、過去のサイゴンが現在はいまないと考えることに端を発している。現在はいない内戦状態の街と《心の仕切りのようなものが溶けかけ》る《気分》とを繋ぐものとは、何であるうか。実は、そこにこそ、『向う側』①が『向う側』②に呼び込まれる契機がある。内戦状態の街で《彼》を追い、《深い心のゆらめき》を感じ、《遠い彼方から彼が呼びかけている》と感じたのは、『向う側』①の《私》だからである。ここでの《私》は、自らが書いた『向う側』①の《私》の《気分》を、《かつて経験したことがある》ものとして《気づきかけ》ようとしているのだといえよう。

この後、会場を出て街を歩く《私》は、すぐ脇を歩く男の気配を感じる。どこまでもついてくるその男をちらりと見ると、その男は、次のような風貌であった。

年齢としのころ三十代半ば、私よりやや長身で、おそろしく痩せていた。目がくぼみ顎がとがっている。だが衰弱した感じではなく、体じゅうの内側からエネルギーが張りつめていた。顔も首すじもひどく日に焼けているが、それでいて蒼白な感じである。

この何日ずつと雨だったはずなのに、汗じみて白っぽく土埃をかぶったサフアリ・コートを着ていた。

(略) いまの東京と何か場違いな感じ、私の咄嗟の記憶の連想によれば、かつてベトナムで私たちがそうだったような雰囲気ふんいけいを、そのままに帯びているのだった。

## 『向う側』②

《男》は、《かつてベトナムで私たちがそうだったような雰囲気》を帯びている。そして、《十八年》前、《私》が《三十五歳》でベトナムにいた時とほぼ同じ年齢に見える。しかし、見覚えはない。だが、《男》は、まるで当然であるかのように、ベトナムにいた日本人の柔道教師の消息について尋ねてくる。それに対して、《知らないよ》と答えながら、《私》の中には次のような情景が浮かぶ。

「知らないよ。アオザイのよく似合うきれいな娘を、よくスクーターのうしろに乗せて走ってたけど」

そう答えながら、私はサイゴン川の岸の近くにあった日本大使館の、がらんとした一階のホールを思い出しかけた。館員たちの執務室は二階と三階にあつて、一階の端の方に階段があつた。私が一階に入ると、ちょうど坊主刈りの柔道の教師が、その階段を、ふとって大きな体に似合わぬ身軽さで、とんとんと駆け降りてくるのに出会ったことがあつた気がする。

## 『向う側』②

本当に《私》が大使館で柔道教師に出会ったのかどうかは、明らかではない。しかし、《私》は、そのような場面を、既に書いてはいはずだ。

そんなことを考えながら、二階への階段を上がりかけたら、上から大きな足音をたてて急いでおりてきた男とぶつかりそうになった。

これは失礼、なんだあんただったのか、とその背丈も重量も私の二倍近いような大男は、一階の広間一杯にひびきかえるような太い大きな声で言った。もう何年もこの市で柔道の教師をしているという男で、強馬力のオートバイのうしろに小柄な土地の女をのせて、夕方の街を、堂々と走りとはしている姿を、私は幾度かみかけたことがある。

## 『向う側』①

見覚えのない《男》からベトナムの思い出について語りかけられた時、《私》は、それが確かに見た記憶なのかどうか判然としないまま、大使館での柔道教師との遭遇を思い描く。そのことは、《私》が見たのかどうかということよりも、既に《私》が書いていたという意味で重要である。それは、《私》が実際に見たことをもとに書いたのか、そうでなかったのかを問わない。なぜなら、この後、《男》の語ることは、《私》が書いたこと、つまりは『向う側』①に重なっているのであり、《男》は、明らかに、『向う側』①の《私》と『向う側』②の《私》とを同一視しているからである。たとえば、《私》がベトナムで住んでいた下宿をめぐる会話では、初代の常駐特派員で

あるという自己認識に立つ《私》に対し、《男》は、《私》が自分を追ってやって来たのだと主張している。

「どうしてきみは、私の下宿の女中を知ってるんだ。ぼくの下宿に、きみが来た覚えはないんだが」

「私のあとにあなたはあそこに住んだんでしょ」

「そんなはずはないな。ぼくが、あの何ていう名前だったかな。

日本人会の役員をしていた何でも屋に頼んで、下宿を見つけたんだ」

「そんなことありませんよ。あなたはサイゴンに着いた翌日、真先に私の下宿を訪れたではありませんか。そしてタイプにはさんだままの私の記事電報を読んだでしょう。私が苦心して印を書きこんだ壁の戦況地図も感心して眺めたはずですよ」

そう断定的に言われると、そんなようにも思われてくる。

#### 『向う側』②

ここで《男》が《断定的に》言っている内容は、最初の引用に挙げた、『向う側』①の《私》の行動と一致している。そして、《男》の言葉を《そんなようにも思われてくる》と受け止める《私》は、ベトナム戦争当時の初代常駐特派員で、現在は東京にいる作家という位置から微妙にズレはじめ、『向う側』①の《私》へと重なって行く。また、それにしたがって、というよりはそれを促しながら、《男》は、自分が『向う側』①における消えた特派員《彼》であることを明らかにしていくのである。その意味で、『向う側』②における《男》(Ⅱ『向う側』①)における《彼》は、明らかに『向う側』①という小説を読んだのだといわねばなるまい。

さらに、《男》が、『向う側』①に登場した現地(ベトナム)人の《男》に言及した時、事態は決定的なものとなる。《男》は、ベトナム人の《男》が自分の行方について何と言っていたか尋ねる。それに対して《私》は、「あの日本人は向う側に行った」と言っていたと語る。そして、《男》は、『向う側』の意味について《私》に尋ねるのである。

「でもあとになって、その男から聞いたでしょう。私がよく聞いていた言葉を。これほど全身の毛穴からしみこむようにむなしいということは、どこかにむなしさそのものの世界があるからにちがいない、と」

「そう、三か月いや六か月近くたってからだった。中央広場のベンチに深夜通行禁止時間のぎりぎり前まで坐って、うしろの芝生で戦争孤児の浮浪児たちがごろ寝し、広場の隅には少年工作員を公開処刑する杭を立てるために敷石を剥ぎとったあとが黒い穴のように残っていて、そのそばのキャバレーには戦争未亡人と難民の娘たちが溢れているのを眺め続けていたとき、私自身、背後から何者かに囁かれたように、そっくり同じように実感したんだよ」

#### 『向う側』②

ここで《私》が語っている《むなしさ》は、『向う側』①の《私》が感じた《むなしさ》である。「あの日本人は向う側に行った」という言葉を聞いたのは、『向う側』①の《私》しかないからである。ただ、《三か月いや六か月近くたって》とあることから、常駐特派員だった『向う側』②の《私》が、ベトナムで実感したことをもとに

して《むなしさ》について語っているともいえるが、それによって『向う側』①の《私》が消されることにはならない。なぜなら、ここでの事態は、『向う側』②の《私》が、単に『向う側』①の《私》に移行したというものではないからである。ここでは、『向う側』②を生きた《私》が、フィクションであったはずの『向う側』①の《私》を再生するかのようになり始めている。つまり、フィクションの書き手とそのフィクションの登場人物との間にあった齟齬は、二つの《私》が重ねられることにより、矛盾となり、そのまま生きられていくのである。『向う側』②において、初代常駐特派員であり、その時の体験を元に『向う側』というフィクションを書いたという《私》を、仮に現実レベルにあるとしてみよう。その《私》は、現実レベルを生きつつ、自らが書いたフィクションの一人称の語り手《私》として、『向う側』①というフィクションを現実レベルに取り込みつつ、同時に生き始めるのだといえる。

そのことは、次のような箇所でも確かめられる。『向う側』という小説を書いた経緯について、《私》は、次のように語り直す。

確かに彼が解放区に潜入したらしいと私は報告書を書いたが、それは有能な管理者だった部長への報告書だったからで（ああいうタイプの人間は、むなしさなどという感覚を意識するはずはない）、その報告に従って部長は処置をとった。（略）

ただそれが“こちら側”での形式にしか過ぎないことを私は知っていたので、帰国してから私は小説という形で、自分なりの、自分のための報告書を書いたのだった——「向う側」という題で。

（『向う側』②）

《彼》についての「報告書」を書いた《私》は、『向う側』①の語り手レベルの《私》である。ここでの《私》は明らかに『向う側』①の《私》と同じ《私》であり、しかも、『向う側』②の世界を生きている《私》でもある。言い換えるなら、『向う側』②においては、《私》の現実および生が『向う側』①の語り手《私》と重ね合わされるようにして更新され、同時に、仮に「現実レベル」と呼んでいた世界そのものが変容しようとするのである。たとえば、具体的に、次のような事態が生じている。

それよりふしぎなのは、去年あたりから急に脚力が弱り始めているはずなのに、いくら歩き続けてもほとんど疲れを感じていないことだった。むしろ自分でもよくわからない力が私を駆り立てて、この分なら夜通しでも歩き続けられそうだった。だがこの奇妙な連れの男はどこまで行く気だろう。

（『向う側』②）

『向う側』②の《私》は、五〇歳を越えている。しかし、ここでは、脚力が弱り始めているとの自覚とは裏腹に、疲れを感じない。それは、《私》が『向う側』①の《私》でもあるとすれば当然だといえよう。『向う側』①の《私》は、三十代半ばの、しかもフィクションの人物である。フィクションを生きた人間が歳を取らなくとも、不思議はあるまい。現に、消えた特派員《彼》が当時のままと思われる姿で、《奇妙な連れの男》として一緒に歩いているように。

以上のように、『向う側』②においては、『向う側』①の世界とは異なるレベルを生きているはずの書き手《私》が、『向う側』①の語

り手《私》としても生き始めるといふ事態が生じている。『向う側』②には、場所も時代も特定した現実的なレベルを設定しながら、そこに、当初フィクションとして明示されていた『向う側』①を滑り込ませ、《私》を二重に生きさせるといふ構造がある。そして、その構造の中で『向う側』①が、再生され、更新されていくのである。それでは、『向う側』②は、どのように『向う側』①を再生、更新し、それによって何を語っているのだろうか。

二、《向う側》を捉えるための言葉

《私》は、昔の仲間に会えなかったために吐き出せなかった思い出を語る。それは、『向う側』①の語り手《私》を現実レベルに延長したかのような内容も含んでいる。そして、《私》は、横を歩く《男》(Ⅱ『向う側』①における《彼》)の行方を追った時のことを語り始める。一方で《男》は、《私》に語ることを促している。

「私は政府軍が攻撃してるのだから、解放区だと思つた。きみが入りこんだ、少なくとも通り過ぎたところのような気がしたんだ」

男は声を立てないで笑つた。

「いやいいんです、それで。何か言葉を、話を、できたら物語を続けること、それがどんなに見当ちがいで、作り話で、無意味だとしても、世界とは起こったことのすべてなんだし、話の中身が世界なんですから。続けて下さい」

『向う側』②

《男》は、語り続けることを要求する。《男》の言葉は、世界とはどのような一面的な言説によつても捉えることのできない《起こったことのすべて》であり、矛盾するが、いかに見当違いの言葉であろうとも、語る中に世界が現れるのだと告げている。それに促されて《私》は語り続けるが、《私》が書いた小説「向う側」の終わりまで語ると、《私》の話は途切れてしまう。

「それから……」

「そこで終わりだった」

私の小説はそこで終わっていたはずである。雑誌が紛失したいま、確かめることはできないけれど。

『向う側』②

そして、それでも《男》は、語り続けることを要求している。

「いや終わってないし、終わってはいけません」

男はきびしい口調で言つた。

「語り続けさえすれば、現われるではありませんか。壺だつて、老婆だつて、燃える村だつて、サイゴンだつて、私だつて、あなただつて。私は行方不明になつて消えたのではない。あなたが私のあとを追い続けたから、私は後向きに、つまり後姿を現わしたんです。立ち去つてゆく私の後姿が見えてきた、とあなたは書いたでしょう。部長への報告書にはなく、あなた自身のための報告書に。そしていままた私はあなたとふたりで歩いている。ここがどこなのか、どこに向かつて私たちが歩いているのか、それはわからない。あなただつてわからない。わからないけどどうして歩いている」

## 『向う側』②

《男》の言葉は、あたかもこの小説自体について語る言葉のようである。現実レベルにおいて、『私』が既に存在しないものと考えたベトナムの事物は、言葉としてまさしくこの小説中に存在している。

『私』が書いた小説において、消えた人物として語られた『彼』は、『向う側』②という小説の言説の中で、『私』と肩を並べて歩いている。そして、そのような言葉の連なりがどこへ向かうのか。それは、まさに『わからない』としかいいようがなく、『わからない』けれども続いていくのである。この『男』の言葉は、小説の自意識とでも呼ぶべき言葉である。この『男』は、『向う側』①を生き、かつ、『向う側』①を正しく読んだからこそ、『向う側』①を生き、かつ、『向う側』①を書いた『私』の前に現れたのだというべきであろう。そして、さらに『男』は語り続け、『私』は考える。

「もし私たちの脚の歩みがとまれば、言葉の流れがとまれば、そこで何もかも消える。何もかも……私たちも向う側も。だからしゃべって下さい。何でもいい。土の壺だつて、ヤモリだつて、しばむことのない花のことだつて、公開銃殺のことだつて、霧雨だつて、濡れた路面だつて、星だつて、星が見えないことだつて、街だつて、黒い河口の満ち潮だつて、水面の油膜だつて、溺死人についてだつて、少女についてだつて、これから私たちが夜空に翔び上がって街の上を飛行する可能性についてだつて……夜はまだ始まったばかりです」

私はわかりかけた。彼が何を言おうとしているか、あるいは何を怖れているか。壺を見たときと同じように、不意に。語り

えないこと、説明もできないことについては沈黙しなくてはならないが、単に言葉が切れることが沈黙ではないのだ。語りうる限り語り続けるその過程で、ある時、ふっと語りえぬあそこが現われるのだろう。

## 『向う側』②（傍点原文）

小説の自意識ともいえる『男』の言葉は、語り続けることを要求する。『男』の言葉の中には、過去の小説にあつた言葉、直前の地の文にある『霧雨』や『濡れた路面』といった言葉が含まれ、さらに、いまだ『私』によつては語られていない言葉も含まれている。それに対し、『私』は、『語りうる限り語り続けるその過程で、ある時、ふっと語りえぬあそこが現われるだろう』と考える。『語りえぬあそこ』こそ、『向う側』①において決して直接捉えられることのない『向う側』②であろう。それは、語り続けることを要求する『男』が、『向う側』①において向かつていった世界でもある。そして、それを現出させるために必要なのは、語り続けること、言葉を紡ぎ出し続けることなのだ、この箇所は語っている。

『向う側』①において、『向う側』に到達しようとした『私』は、それが果たされなかった最後の場面で、次のように語っていた。

あの男（引用者注、『彼』と親しかった現地の『男』が待つてゐるものが、いま私にはわかる。それがただ待ちつづけるしか、到達する道のないことがわかる。バスも国道もないのだ。しかも待つて待つて待ちつづけても到達できるかどうかの保証が全くないこともわかる。ただ待つただけだ。特派員には、あの朝、不意にそれが訪れたのだろう。



『向う側』①

『向う側』①の《私》は、『向う側』に到達しようとして果たされず、『待つだけ』しか方法がないと結論した。しかし、『向う側』②の《私》は、『向う側』に到達するのではなく、『向う側』そのものを現出させるために、語り続けねばならないのだと覚悟している。そして、これは、『向う側』という小説を書いた《私》の覚悟なのでもある。

『向う側』②は、『私』が『向う側』②そのものを語り直すかのような言葉で閉じられている。

「二十年なんてもう存在しないようなむかしだけれど、でも何となく出かける気になったんだ。せめて当時の仲間のひとりぐらいには会えるだろうと……」

『向う側』②

この言葉にあるとおり、『私』は《当時の仲間》<sup>フィクション</sup>に会えているのである。その人物は、『私』が過去に小説に書き込んだ人物で、自身の行方が探られるその小説を読んでおり、さらにその小説の書き手を鼓舞している。そして、『私』は、自らが書いた小説の自意識であるかのようなその人物に促されながら、語り続ける覚悟をしているのである。

このように、『向う側』②は、『向う側』①の世界をその内部に取り込み更新するメタフィクションとなっている。そこでは、『向う側』①において待つべき世界だった『向う側』を、語り続けることによって現出させるべき世界として読み直し、捉え直しているといえる。そして、それは、単に語られた内容の話ではない。ここで告げられ

ているのは、書いた者としてあるはずの《私》をも、語られる者としての《私》、書かれる者としての《私》へと更新し、不断に「書く」ことのうちに取り込もうとする運動の始まりではないだろうか。

三、『向う側』②の意味と位置

『向う側』②の《私》は、ベトナム戦争の初代特派員であり帰国後『向う側』という小説を雑誌に発表したという点で、日野啓三と重なっている。ただし、ここでは、その《私》が、決して安定した語り手としてでなく、書いたはずの小説によって生を更新され、書き続けることを覚悟する作家として書かれている点が重要であろう。『向う側』②には、「書く」ことへの意志のみが表れているといつて過言ではない。

日野啓三は、小説第一作『向う側』以来、様々な小説を書き、その時々のやり方で『向う側』に迫ろうとしたと考えられる。そして、一九八一年「すばる」に連載した『抱擁』<sup>4</sup>の頃、一つの転換を迎え、より物語的な構造を備えた小説、自ら「都市幻想短篇」と呼ぶような、幻想と現実の入り交じったともみえる小説を書き始める。『抱擁』においては、重要な登場人物霧子の父親を、ベトナムで『向う側』に行くと言って消えた男とし、まさに『向う側』①の登場人物の次の世代を描いている。また、一九八二年発行の短篇集『天窓のあるガレージ』<sup>6</sup>収録作品では、日野作品において初めて、視点人物が少年あるいは女性に変化する。<sup>7</sup>日野の小説は、作家として認められた「私小説的傾向」<sup>8</sup>の作風から離れ、物語的であることも幻想的であ

ることも厭わぬ自由を得るのである。

この、一九八〇年代に入ってからの日野作品の変化は、『語りうる限り語り続けるその過程で、ある時、ふっと語りえぬあそこが現れる』という方法で『向う側』に迫ろうとするものであるだろう。その意味で、一九八三年に発表された『向う側』②は、日野自身が、小説を書き続けることによって『向う側』を現出させるという意志を確認したものだといえる。あるいは、『向う側』②が書かれることによって、言葉を紡ぎ続けることの意味が明らかにされたというべきかもしれない。そして、『向う側』②が示しているのは、小説においてはいかなることも起こり得るし、世界を現出させることもできるはずで、そのためにも、あらゆるものを飲み込んで書き続けられねばならない、ということであろう。書き続けられた言葉によって、あるとき『向う側』が現れるかもしれない。そして、それこそが日野啓三の小説にとって至福の瞬間なのかもしれないが、そのことを確かめるためにも、日野の小説を丹念に読み続けることが必要なのである。

注 (1) 一九八八年二月、成瀬書房より特装限定版として刊行。『日野啓三短篇選集』上巻（一九九六年一月、読売新聞社）にも、改稿の上収録されている。なお、『向う側』①からの引用は、すべて初出誌に拠る。

(2) 『向う側』②からの引用は、すべて初出誌に拠る。

(3) 拙稿「日野啓三『向う側』論—言葉の外部へ向かう試み—」（近代文学試論）第三号、一九九三年二月）

(4) 『抱擁』（一九八二年二月、集英社。初出は、「すばる」一九八一年・三・五・七・九月号）。なお、『抱擁』については、拙稿「日

野啓三『抱擁』試論—『向こう側』の世界—」（国文学攷）第一四四号、一九九四年二月）をご参照いただければ幸甚である。

(5) 日野啓三「文庫版あとがき」（福武文庫版『天窓のあるガレージ』一九八七年七月）

(6) 『天窓のあるガレージ』（一九八二年五月、福武書店）

(7) ここでいう「視点人物の変化」は、日野自身とも見なされる「視点人物」から離れたことを意味する。したがって、ここでの「少年」には、日野自身の少年時代を題材とした作品群のそれを含めていない。なお、このことについては、拙稿『少年』という可能性—日野啓三『天窓のあるガレージ』論—」（国語教育論叢）第一四号、二〇〇五年三月）、および、拙稿『である』ことへの異和—日野啓三『夕焼けの黒い鳥』論—」（国語教育論叢）第一七号、二〇〇八年三月）をご参照いただければ幸甚である。

(8) 前掲(5)「文庫版あとがき」

( ) やまね しげき 松江工業高等専門学校准教授